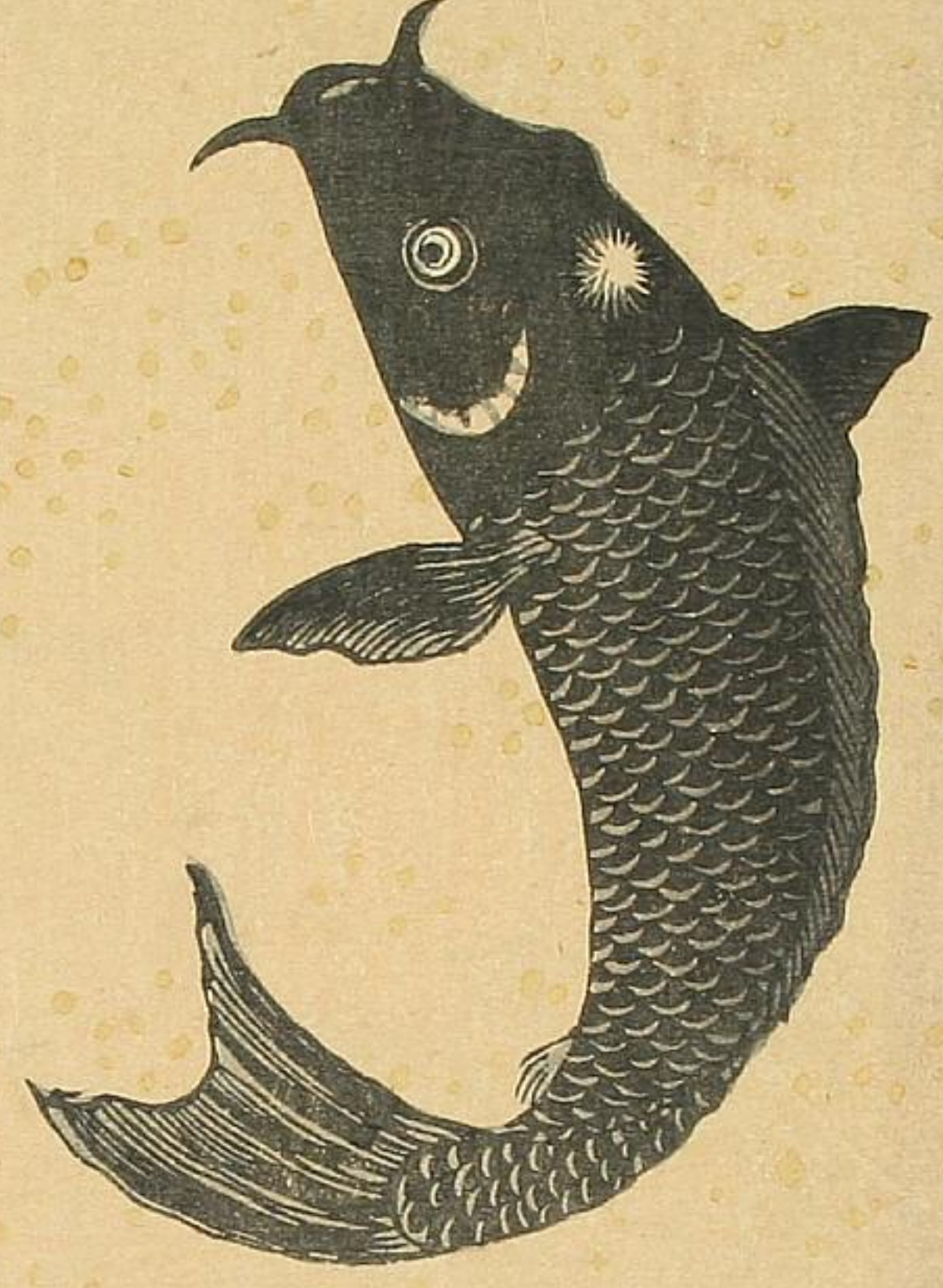


新門五郎遊俠譚  
一冊  
原稿  
補遺



廣重  
全品

新門五郎遊俠譚



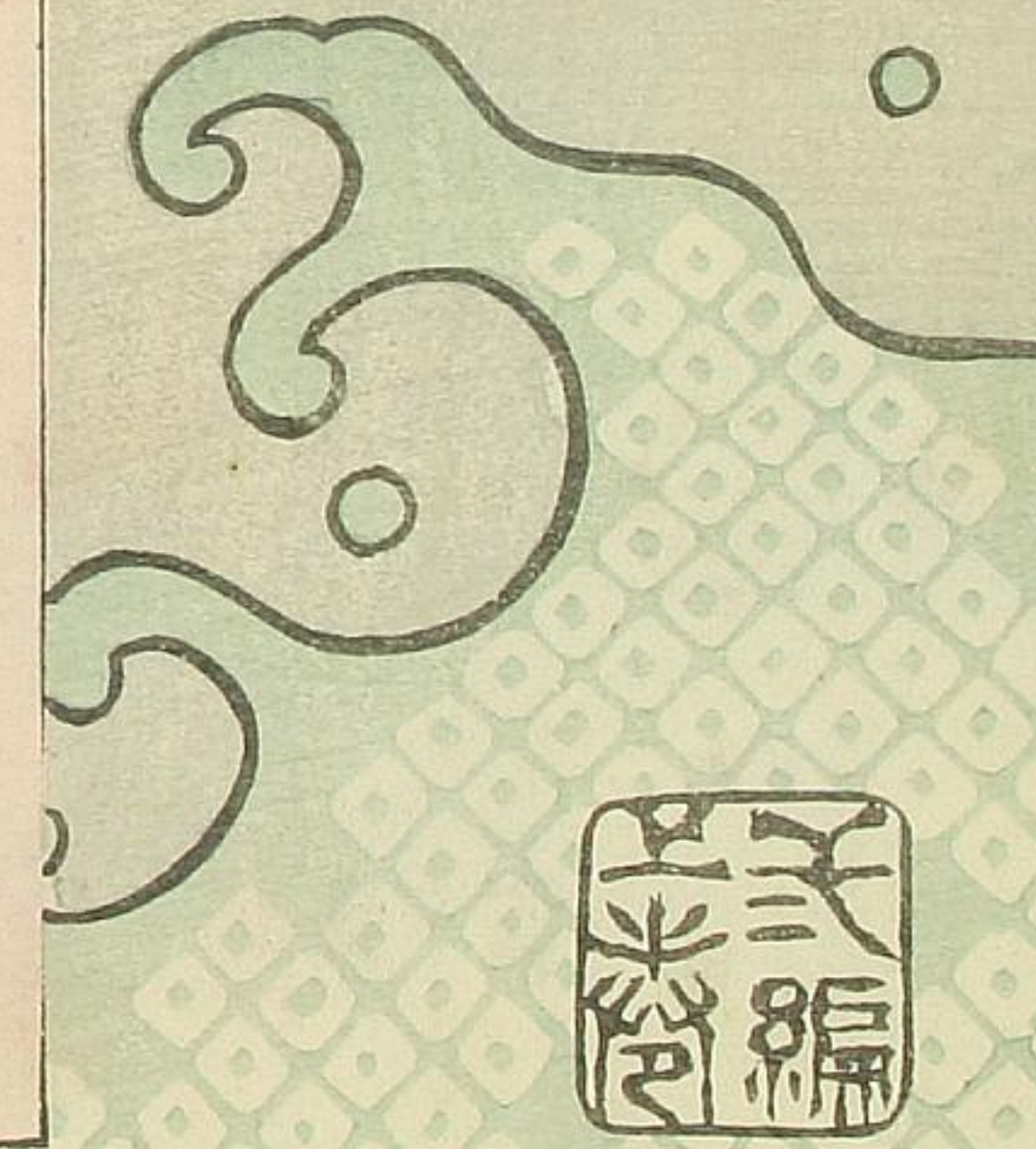


A 466

26

48-8164

ちとらふて  
 ののころり  
 おほひころりは  
 ころり

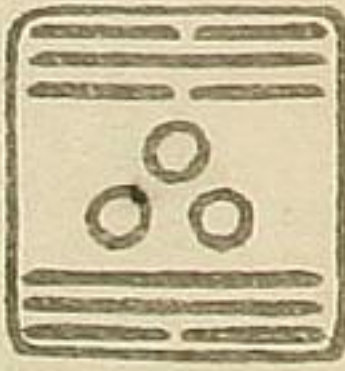


新門辰五郎游俠譚叙  
 草双紙と合巻と稱するは原五枚二冊と二冊合して一冊と一冊を  
 上下二冊一帙小製し一巻に合しあり然るを方今の草双紙と  
 由書肆は是亦合巻と稱する謂あり又草双紙其昔人情  
 世態質素の頃還魂紙武佐墨を摺る草紙ありと云ふ

最臭うりうり臭草紙とせよ之と稱しと故世にさらぬ名  
 義ありとて文明の今日に至り九枚三冊一帙の製本と做るを  
 以て之とこそ九三草紙の稱謂を得れと云はるる耳と云ふ  
 ふしと陋拙杜撰の余が是の綴る九三草紙は少く時代の標あれば  
 故九三草紙と云われせえ遮莫傍訓新聞の續雜報を再綴る  
 世話狂言の新奇を競ふ少く編輯先生方ふしと述ゆ及ふとぬ  
 梅星叟今の世態あら髪天顛を揆る焉澁ある所興ふとて

明治十二年第五月立夏後五日

梅星叟乙彦記



草苅苗

元禄三年印本



木導

下總

鉾子の

網持

飯沼

助藏

新吉原仲の町

浅草寺  
地内  
女髪結  
か元

角屋の男  
久次郎

校書か玉



新門畧系

町田仁右衛門

新門辰五郎

仁右衛門ノ養子 実父中村金八幼名金太郎后氏ヲ新門ト更公  
明治八年九月九日没享年喜壽法名徳廣院正養信學居士

仁三郎

后町田仁右衛門ト稱ヌ安政五年壬午五月廿五日没享年四二歳

さわ女

は組頭取忠兵衛ニ嫁ヌ現今ノ忠兵衛ハ其腹子ナリ

松次郎

現今ノ町田仁右衛門

さく女

穴藏大匠庄助ニ嫁ヌ

元次郎

早世

仁三郎

現今山内ノ蕎麦屋新清庵

金太郎

現今父祖ノ職業相續

沙々々々々々  
ちうらうらや 飛ぼつる 羽り

右ハ辰五郎生前の一首此ハ括あり編中ノあるハ



三入...

浅草...

東御...

と...

名...

と...

甘...

あ...

小...

一...

され...

金太郎

仁三郎

七...

同...

天...

北...

その...

東...

の...

身...

往...

行...

三



三軒の家もあつた露に  
 小封疆のどく二堆の隅で  
 夜陰の稲屋へかゝる人の他  
 もたのび彼の曲りの們に  
 宿屋で有る二個の奴に  
 屋の割烹で嘔吐するの何  
 二個の奴に  
 ね同敷  
 仍是ぬけの鼻

白玉通ふ  
 相後下福園  
 動らぬ輝の懸る小縁の  
 不ろ筋筋行燈を提て  
 の曲りの勢ひも似ど首を  
 一をたせ下い面肌を  
 身を放ち御と下と冷  
 近二吟三何とあつた  
 くの喧嘩の音前達  
 頼まれど醋い酒の  
 有はたさるゝ所為  
 小か緑もさ一  
 此人のち教へ  
 あれぬの心  
 頭お枕を  
 是れは  
 頭お枕を



動らぬ輝の懸る小縁の  
 不ろ筋筋行燈を提て  
 の曲りの勢ひも似ど首を  
 一をたせ下い面肌を  
 身を放ち御と下と冷  
 近二吟三何とあつた  
 くの喧嘩の音前達  
 頼まれど醋い酒の  
 有はたさるゝ所為  
 小か緑もさ一  
 此人のち教へ  
 あれぬの心  
 頭お枕を  
 是れは  
 頭お枕を



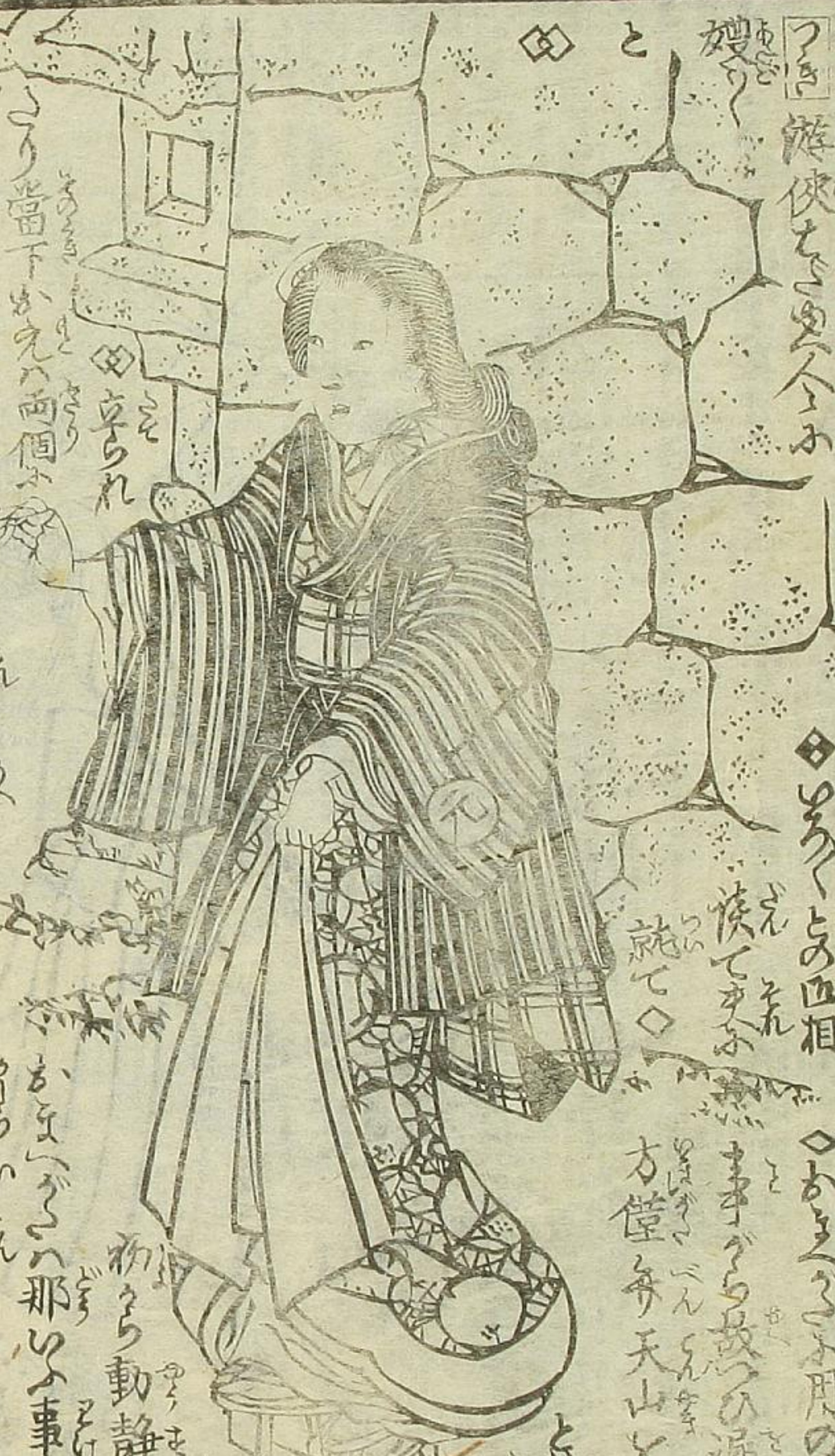
在けりて不庭日を送り申す新門もろのきり一儀新門の  
 ありて三三を團つて婢門不審つちやく提灯雪洞と  
 携て出まるとぞ戸締りを解く  
 せよ一袖吟吟と新門頼まれ奉せ  
 等閑らぬ彼客固執お指徳の  
 是は是ら車と弁見屋次  
 身をつたふ下走り行て来ま  
 出まるとぞ急お推せ  
 めそれる今小那の衆  
 万為送し小出と奉す  
 も前が君  
 鼻法りて云ふとらふと  
 と喚做を當時巧手の笑へあを

透し見て嬖とト立どられバ  
 めの廿妾ト迫よるハ女髪結のええ  
 女の声お呼らり  
 れて兩個ハ再び  
 愕然と一の氷月  
 みる相行燈  
 の遠  
 竹ふ  
 手は白き  
 救んと一なる西路山  
 の行はれり哥とこち  
 手は白き



新門もろ笑ひて那奴們う那も  
 めのあんとてい毫も  
 無一提灯  
 持て  
 表の  
 とのの  
 之例と  
 門口不  
 異しく  
 立寄るうらうらと  
 周小と  
 庭の外  
 立けりて遺されて只兩個面見合しと野于玉の闇お紛れ  
 とそくと立まらんとしと有繫お仲見世通りと輝りて弁天山をく解く

と喚做を當時巧手の笑へあを  
 得意場遠道  
 小最とて廻る  
 龍ふて廻る  
 得る銭少るら  
 ねバ寡とら  
 の我ら若介  
 ども道理を  
 日  
 小  
 日  
 小



ついでに遊侠もあつた

◇あつたの山相

◇かまごつて用ひの出来

と

◇かまごつて用ひの出来

方僅年天山と後て来る

と

◇かまごつて用ひの出来

と箱屋の

と

◇かまごつて用ひの出来

裏の那の

と

◇かまごつて用ひの出来

嫁れて最

と

◇かまごつて用ひの出来

初ら動静ハ波

と

◇かまごつて用ひの出来

かまごつて用ひの出来

と

◇かまごつて用ひの出来

の頭ハ遺恨のつるの

と

◇かまごつて用ひの出来

て兩個ハ天願せらる市九郎といふ

と

◇かまごつて用ひの出来

どうつてのさうと三人助藏ハ

と

◇かまごつて用ひの出来

頼をれと事

と

◇かまごつて用ひの出来

隅屋ハ酔倒

と

◇かまごつて用ひの出来

且那ハ社里ハ

と

◇かまごつて用ひの出来

玉より姫兩個ハ

と

◇かまごつて用ひの出来

相方のさうと

と

◇かまごつて用ひの出来

疑ハハハハハ

と

◇かまごつて用ひの出来

日ハ暮ると裏ハ廻

と

◇かまごつて用ひの出来

密ハ動静ハ竊聞

と

◇かまごつて用ひの出来

此方の幸ハ隅屋

と

◇かまごつて用ひの出来

の奥ハ新門ハ

と

◇かまごつて用ひの出来

立関ハ王

と

◇かまごつて用ひの出来

ハ新門ハ

と

◇かまごつて用ひの出来

佐野浦さんの嬢さんの事ハ付

と

◇かまごつて用ひの出来

火餅の前ハ居りて煙草吸

と

◇かまごつて用ひの出来

判ハ本ハ兩個ハ向ハ馬

と

◇かまごつて用ひの出来

早ハ茅子の巾着ハ三三

と

◇かまごつて用ひの出来

かえり住居ハ判りけ

と

◇かまごつて用ひの出来

梅園院

と

◇かまごつて用ひの出来

の地内ハ

江戸

五



請ひん引とるとの相談の延びてあつては此方門の天  
骨打の



泣き  
あつて  
みんら  
れて  
面目  
さか  
あか  
の顔  
微笑  
お元ハ  
ソラ  
下り日ざろ

れりやうかめ  
けの喧嘩も  
画餅ふあつら  
新門の天願面一紙  
と付て選て仕立へその後ろを  
十日と廿日か玉の相談が延るハ必定情  
男ハ禁足とあるその間ハ玉と旦那の方ハ生捕らるる  
極上策このカ覺の喪の金ハ餘澤あめこのうきくと  
及こやうが兩個の相俵折よく新門の門口小立て  
居るのハ思ふつちと知ぬけをさる丸カイヤヤとドモ



さいか前さうの男のくせふ  
云ハあいでん  
善惡の  
理と自分  
の身の  
不為  
が解らるいろら各自小耻で  
暉くのござア測量  
てもどらんね助裁  
さんとやらハ鎌  
の人よりんバその  
お玉とやらを

此方へ首尾よく因つて処が國ふ日江戸ふ十日  
新門の浅草をりり江中へさるる諸

場て誰あらぬ者の  
の當時の俠客  
あつたその俠客  
おへ田舎の大屋ふ属の外なるの當  
坐の酒代で頼要の時の夜ふ立す  
それのてあく新門ふ向ふ



様をいふ  
餘り喝采といふ  
もあつた那を  
うあらるい新門  
の俠客へ  
隨院の長  
兵衛以  
還那の  
人さる  
と  
世間の評  
判それ  
ハこそ今夜

張ら此土地が狭くある  
あれごと各自の  
不為心あらうか  
お前こちも放蕩  
あんぢがめつそら我の家(ゆ)ゆれ  
あひかりし身がらで居るされど破落戸  
ごとく人か人ごよ事ふの善悪順逆  
とを順ふ属けの善事ふり逆ふ属  
けの悪事ある云へもあれの理をら前  
この所行の嫌々女を無理やりふ金で自由  
為さうとするの逆さうら悪事ふり新門の  
引うけこの順さうら善事ふりて為遂も顔も立ち  
かまふこの為遂さうが既ふふの喧嘩をとりめさうの



の始末大難  
あ者るれ何  
ておさ  
うの家大膽  
お大お  
次



通称ふらりののが今  
 頭が家名相をくして  
 辰五郎と成てうらを組  
 ぬ加入て頭と成て今の顔み  
 ろこの由天性ゆこごとゆ  
 理由の頭の寛政十一年未  
 だ一の三月五日生れあて三月  
 の辰の月 今の子どもゆ  
 郎五日の郎を辰五  
 郎と一識者が  
 云ことやら何と  
 かまへがともらん

子ふの  
 成こののが  
 當時は  
 組ふのいらん  
 祝品を傳法  
 院の庭掃除  
 役と持て  
 かりとれ  
 由傳法院  
 の裏反畝  
 の新門際  
 小住居て  
 ゆので

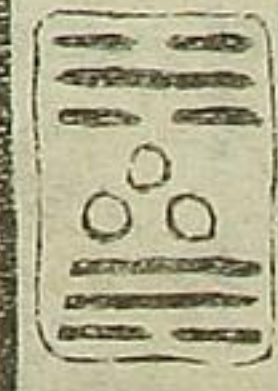


ざらあま素所人の  
 子でいり一假  
 令身と持てつ  
 こととせせ  
 己がちふ送る  
 あり控う毫  
 男ら一と行て  
 のけら那  
 ろ小同ト米  
 喰ふ  
 虫ご小  
 斯もちがふ  
 むくと一かへ

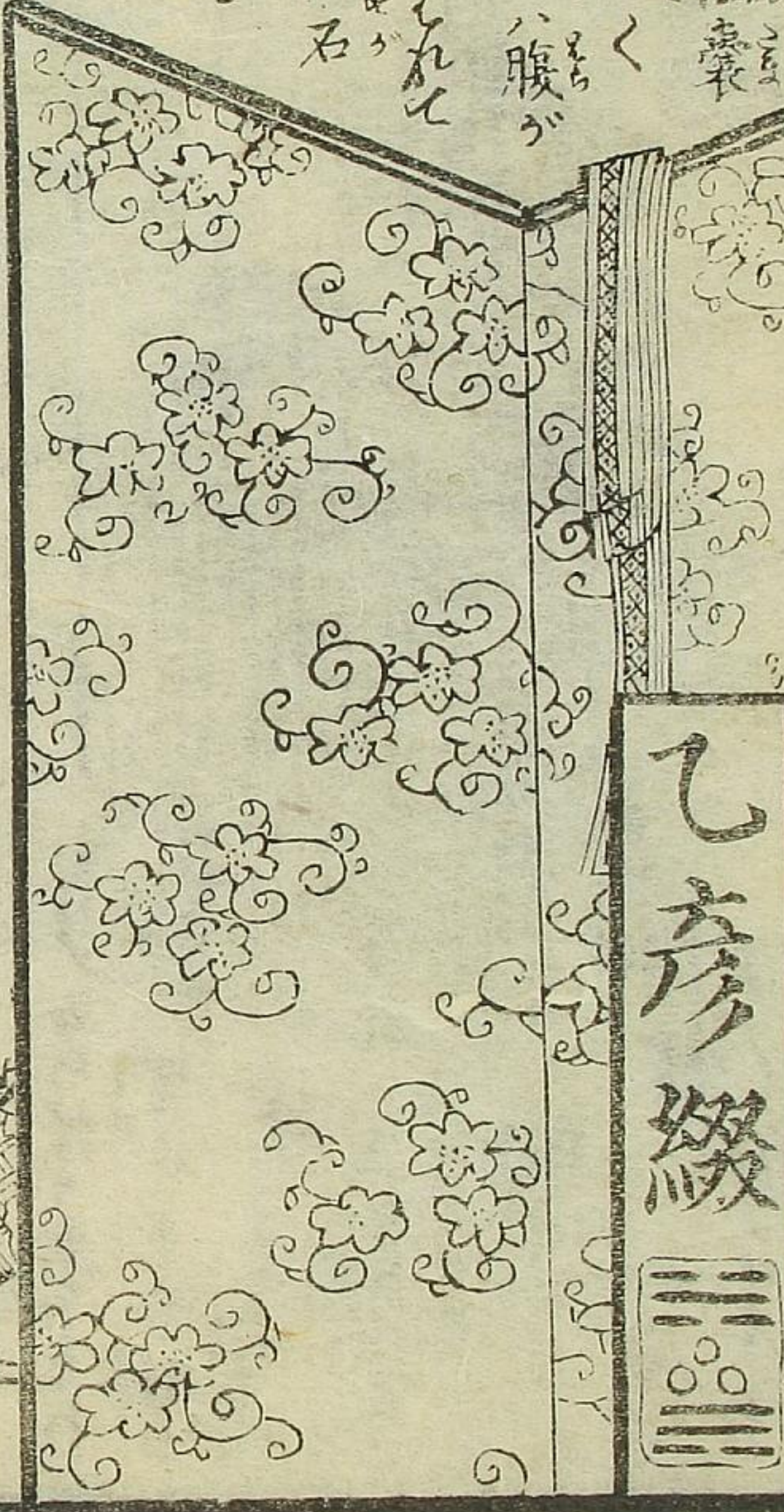
新編 二編 其

六

乙彦綴



思ふと陸奥  
も釣方で心安く  
しそるると妾ハ腹が  
立ちやうとハトいそれ  
近二吟三ハ流石  
小慙愧  
面色あり  
屏風の内  
うら一可ハ披露  
先ハ洋判ハ



續き出版仕相替り

芳春画

前後の珍説奇談  
春雨文庫第四編  
一可破下ル 版元 故白

開明 小説

春雨文庫

第四編ヨリ 近世の烈婦孝女乃傳説を  
引續キ出版 記ヨリ面白キ珍書あり

松村春輔編輯

復古物語

初編ヨリ 八編マデ 出版

這ハ明治太平記の前篇ヨリ嘉永  
六年亞米利加使節相舟浦賀へ来船  
以來明治元年伏見戦争迄委  
志ヨリ面白キ書也

和田定節編輯

参考鹿兒島新誌

半紙本 初篇ヨリ七篇 迄全部十五冊

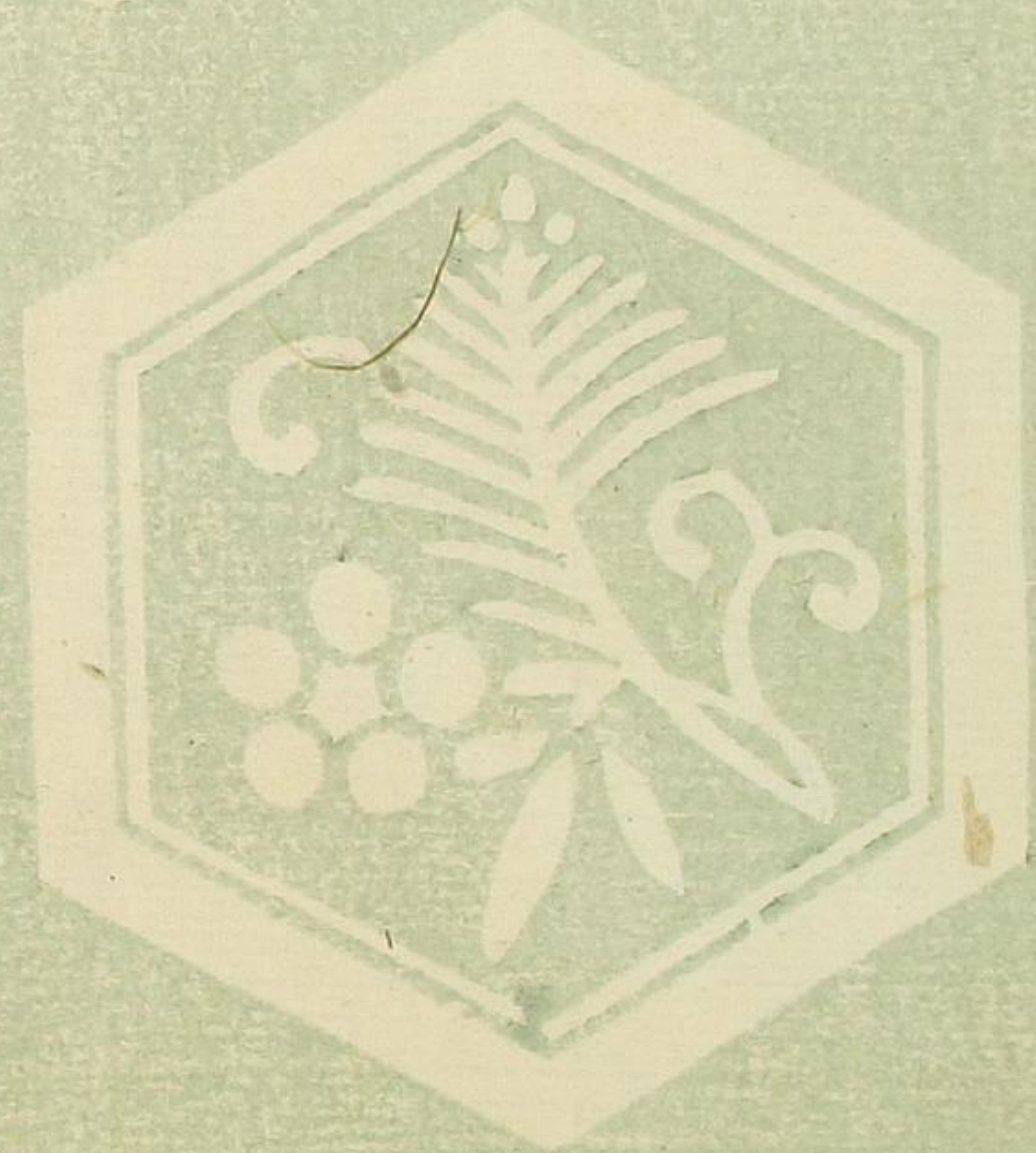
此書西国征討の始末を詳細  
志ヨリ第一の実録あり

東京書肆

大島屋

武田傳右衛門

弥左エ門町十三番地





新阿辰五郎  
游俠譚

梅屋五郎

よきまゝ

中々



上  
當下  
吟三考  
小懸  
改め  
頭小謝罪  
その子品  
やう小和諭  
られ  
む

四面の  
謝罪の  
頼  
巧  
おえ  
昇  
お玉  
の  
助  
れ  
と  
口  
と

新阿辰五郎

二編

次

使つて何様巧まを為さるもあねを

と云ふれまいら新門方あり

静をかき

体は避て動

静をかき

舞臺せうけて娘子供の踊狂言の催し

佐の浦

のち嬢え

幕

持つと

あり



其うち好孫會日

有ら実いあまこちが斯ごと妾ら

頭あめ禄えんふ出

此方あり花

知恵と付

かえ

大勢

属てへ行けど

尚非常でも有

と尺後不立て実体み人いあ

内相談由(妻いあま)こちと思

り実い誰ぞ見立えやうと法合て来

存ぶが是へ行て

那ごろ不閑て西個へ大喜

温袍て衣服が那も不都合ごろふ

温袍て衣服が那も不都合ごろふ

自身みづかみのあたま指ささしてそとに  
か店かみ宜よろしく小こ法師ほうしとをさうらひん

ごうりごうり兩個ふたつへ今いま  
夜よと泊とどり明日あした

察しつへとて

佐野浦さののうらの女をんなが雪ゆきの  
まじりまじりの計はかりらひま

近きん二吟にぎん三さんあんあんんんる  
程ほどさまでさまでの雑談ざつだん中ちゆうかひん

踊おどりの吐はきけ不及ふじやくうそうそも  
馬道うまみちもも醬油しょうゆ尚なほ屋や

佐野浦さののうらの女をんなが雪ゆきの  
まじりまじりの計はかりらひま

今般いまぱんその身みの持もつ  
へ狂言きやうげんが天神てんじん記き

るるるるも容顔ようげん美み  
麗れい今いまの別わか品ひん湯ゆ

今般いまぱんその身みの持もつ  
へ狂言きやうげんが天神てんじん記き

るるるるも容顔ようげん美み  
麗れい今いまの別わか品ひん湯ゆ

るるるるも容顔ようげん美み  
麗れい今いまの別わか品ひん湯ゆ

るるるるも容顔ようげん美み  
麗れい今いまの別わか品ひん湯ゆ

脚色きゃくしやくど加かへへ先まへ松まつのの

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

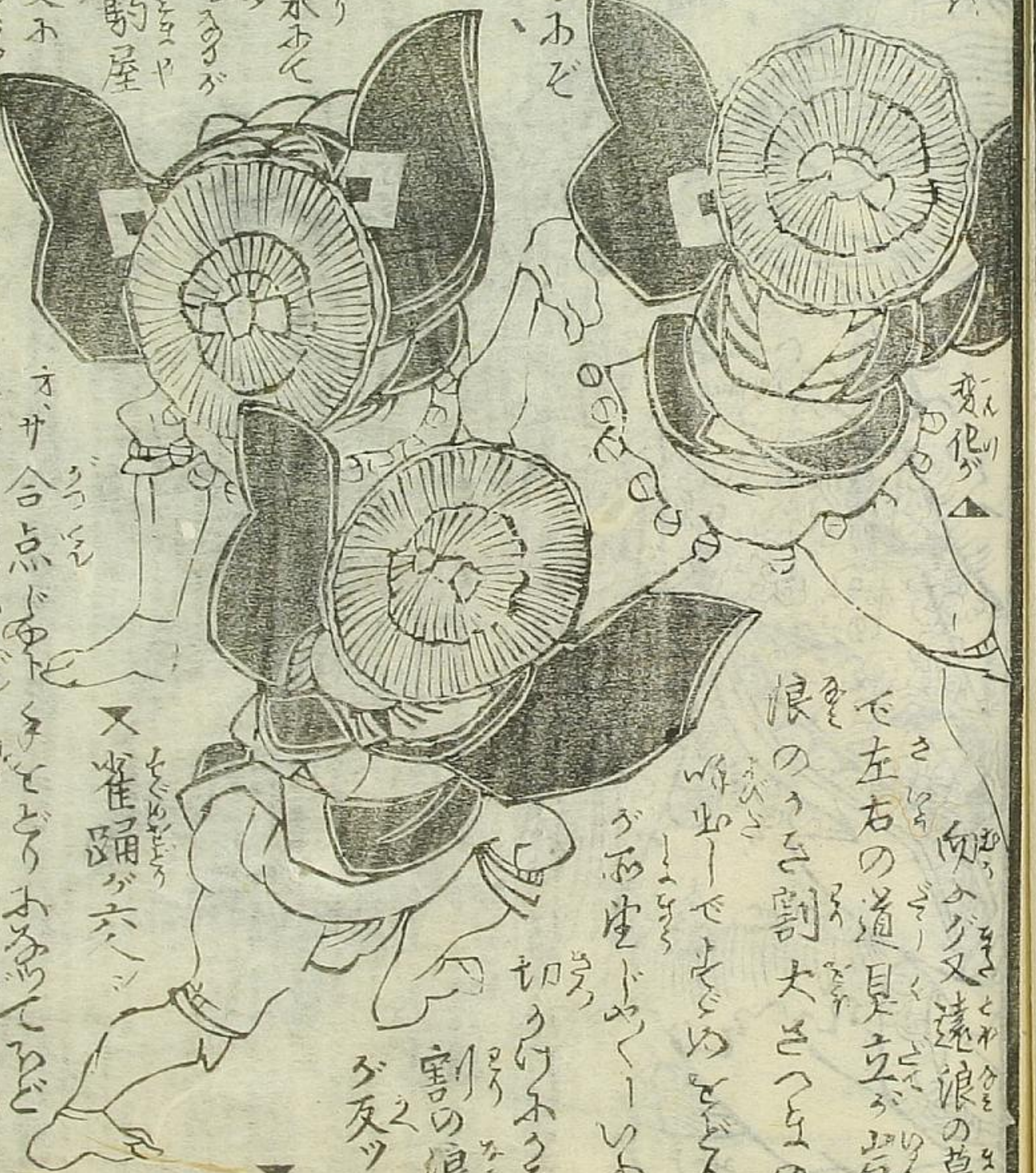
切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと

切きつとつとつと  
と。岩間いわま  
と。正射せいしやく  
と。頭かぶハハととト  
相方あひまのの写しゃり  
ののふて上かみを  
と。うりうり並なみ松まつの  
幕まくと引ひくと





怪しげなるれんげの  
うごめく入り小

三人相まの子立  
まのりみわりの雀踊り

と左言(返)こむとこえ  
小木の頭浪幕

さあかことと戯  
場あらら

白奪舞  
基正面三間

新文ウで不作あめこのころと常々  
ろふと思ふト吐一お思をば按と  
更一男女卧床を異ト  
かのく眠りお着ふたり是ハ辰五



龍宮の唐子が入り相方で頭つれると向正面  
龍宮の遠景で左右の山基屋の前一及ると

長唄

お雑  
の都  
花美  
み姿  
小あ  
れる  
世  
鳴  
ひり



開ハ措て再脱新門の辰五郎ハ  
出んとし門口小異一と者ガ立てあころの海から  
ぬとえりて思ひゆ三足返巡一が持てる

後の  
後柄  
あぞ  
あり  
くる

提灯さし如くそ方と信と打及そのを  
 送りて場近るるもろろあり小婢們の  
 つのもかく持てる雪洞とやうして門辺とるれ  
 是は甚麼の黒法衣小帽子と着るる最殊勝  
 ある修行者う開らぬら灯り  
 薄暗とれ判然とらぬ彼方  
 小異の修行者  
 自若としてま節  
 作りいふ此家  
 のうちへおやさん  
 いふと小婢の手をく関つけ  
 笑ひかちやア新孝えんはりま  
 せんト問とれて彼方の修行者へ徐と

あつちのあつちの  
 いふの當時日喜院の  
 地内不住りる替間楊川  
 秋考り  
 翌日  
 客  
 家不  
 ひるの



進も入るお見合とて新門あつち呆れ  
 ろから小婢ひつ何の洒落ど  
 愕然とていへ彼方もその  
 ろから  
 白刃の  
 中へ  
 恥  
 頭  
 び  
 う

めりて出入の音  
 曲人一同が  
 一番づ  
 持せらる  
 就中孝  
 の持へ中節  
 鉢の木子て  
 最明寺時頼  
 松り今朝も

あつちのあつちの  
 いふの當時日喜院の  
 地内不住りる替間楊川  
 秋考り  
 翌日  
 客  
 家不  
 ひるの





夜裳を着け下座を入れても合せとある  
 指から他事と依頼しうらら中なる捨つら  
 措くぬ信切りの新孝がその  
 頼られ一軍ふ依て  
 勅諭を伺ひか  
 稲屋一まる夜  
 陰に幸ひ最明寺  
 の衣裳を看ておとつれ  
 尚  
 裁判  
 小落三人借書  
 白新門ふうち向ひ

迅速下座と新門ふち  
 と揺り那と家へ帰ると  
 う先刻橋をくら保りかけ  
 爰(寄ると臨事)が起つて  
 又例の頼も色もあら  
 北里(ゆ)こととらト関て  
 新孝心不當り然承  
 ことハッてお出先を  
 お苗やを理由でハ  
 るい(一寸一言)か  
 下さい今日私どもハ  
 兼番事件で  
 仲見世の

洒落不和愈て整  
 頼めま欲し  
 心算業からの  
 けらひり  
 そのく 辨問するのハ人奉の夫小お抱らむ  
 独り中裁まるると此ハ可笑の味ハ  
 わりて難易円整の功を奏し  
 世用不足ると本名とに様川の元祖慈悲也  
 或いはその大坂るるる利新左衛門とれあり  
 その性頼才債書と要一脱俗雅致の行  
 状なり豈酒席小戯劇と献と他の放蕩と  
 煽動とりの辨問と看(けん)や斯て世ハ無用有害の  
 放浪ふと云はすのを他活休題そのとに様川新孝ハ白

頭(り)の(り)本城(り)  
 かし揚(り)  
 喧嘩(り)さ(り)  
 今先刻  
 関中(り)か  
 生(り)喧嘩  
 くら  
 か連  
 の  
 容人  
 の  
 事(り)あ(り)き  
 外見(り)屋(り)か(り)土(り)而(り)不

然る先か前の方の  
 関係うら関て行かう  
 上あがれば新孝も  
 便室(通り)てかろくと  
 共火鉢の中身足  
 先とり敢て新孝が  
 咄し出し一線を



尚然るれ小可も事伴の正動  
 辭を伺ひさくは相傳ふ今晚そ野の  
 次第ト衣裳の居士衣の袖と及しく  
 小とりひを拵をそれ夜五郎由  
 さらひさから務事を知ッて居る  
 か前も関係がいらと云へる

あら中をば暴小玉が  
 井見屋(哥妓)下抱  
 られさきも新孝  
 周旋する

雑貨商  
 知らんとてお初(お)  
 帰らば浅草あ  
 新孝が  
 仲介世の  
 往來ふて

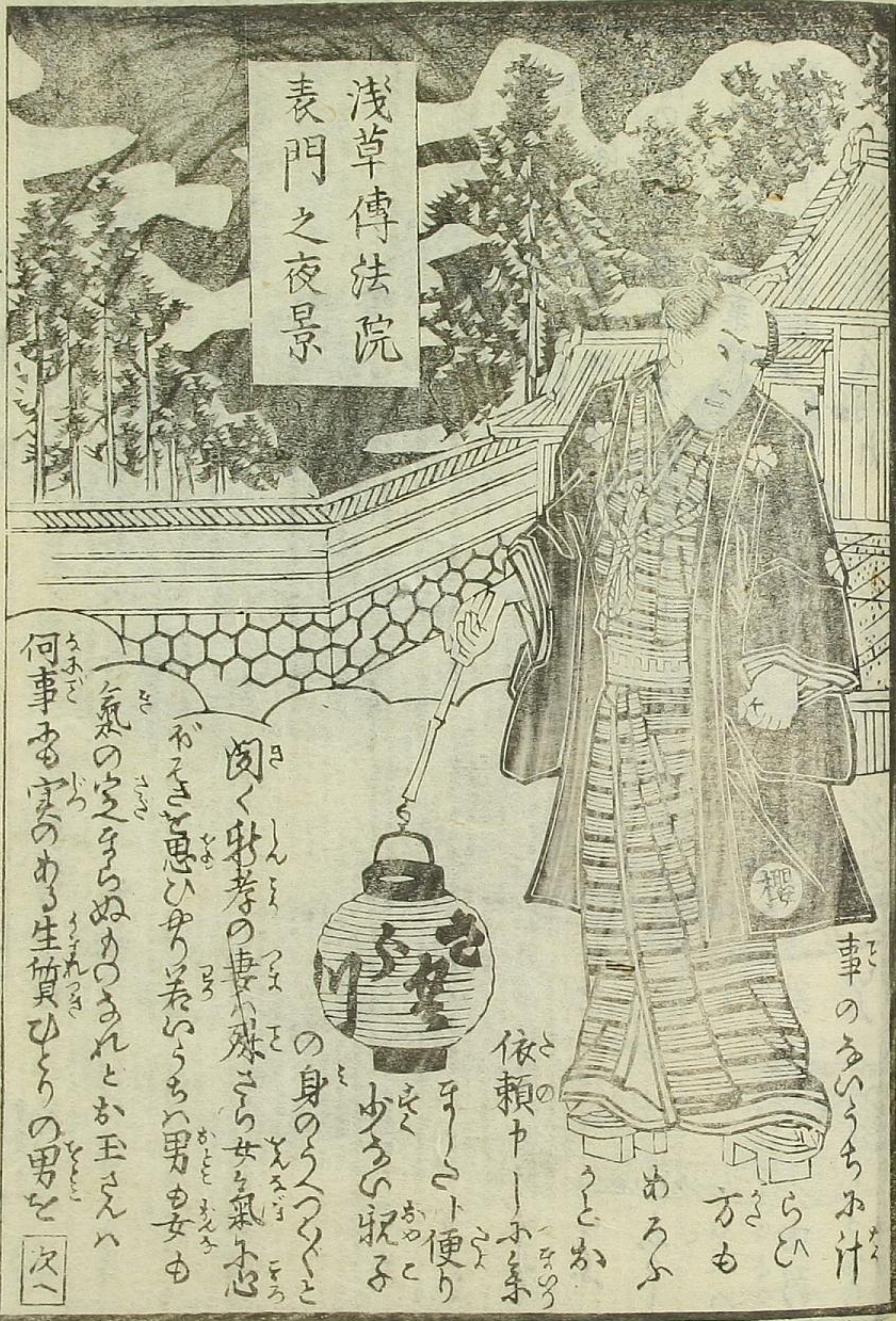
然る先か前の方の  
 関係うら関て行かう  
 上あがれば新孝も  
 便室(通り)てかろくと  
 共火鉢の中身足  
 先とり敢て新孝が  
 咄し出し一線を



生れ  
 女をのむ  
 久次郎  
 災難小  
 遭ひ  
 稲屋へ  
 つれこま  
 れる次身  
 と咄し全く  
 その事のあり  
 や否や  
 貨商が助藏  
 小このまればお丑お  
 其様偽り次へ

新門  
 新孝が其地  
 小全盛りの頃より怒  
 意ふ

母の涼川の  
 の哥妓か玉の  
 打らふ彼



浅草傳法院  
表門之夜景

車のあいらちみ汁  
 方も  
 ありふ  
 うとか  
 依頼し—ふ系  
 手—ト便り  
 少ない状子  
 の身のうへついで  
 関く財孝の妻、妹、その女も氣志  
 かそきと思ひ申う若いらち男も女も  
 氣の定まらぬめいのかれとか玉さんハ  
 何事あるのわら生質ひりの男と

行月一編



談しを聞け

せいのふもあくと全くの裏事なれば又次郎いりて  
 ようかろくと海の中あて底のまゝ執でも受—めり  
 うか王ハ只一條ふ然とのと推量—これハ幼稚  
 する—え格別也(女のせまい情より那もとせ  
 為—うもあれず年老—私ども力と教む  
 ひろり女ふり—の事でも有—うら  
 何と為—うもさけりい  
 と見—るこゆらんとあへ  
 られてハあむ—も措けど此方  
 で動靜を探つてゆらひ異を

新門二巻

一六

つら 大切なるものにておれど情づらめんど

もろもろ無理へいさ

稲屋久さんと申さ

かおるるるる

おののち

ねへお前

さんご同のりられて此考

ハ思ふやう稲屋お然り

條のち客が折あゝある

るれと床屋の毎事

淫行あり又こまお

やハ虚実も解らば何れ

稲屋の動静を窺ひ次

よれはあらくらえ直談

相談の爰極り

夕暮前の匆忙いせ世へ行も心

日暮てくらお緑ののまき

什つて行らぬお若虫

長くあり夜が更らる

とて正兵衛さんあ

中ふ手紙ああら

使をきこふ宜らふ

食も済し老母を宿

推糸仕ッて言上

例の口へ通して

例の口へ通して



茶利をいりの  
下通りを因て  
おろこと  
新門の  
久次  
郎有  
次方の  
一五千  
とあ  
よ然

白井見や一  
合目小行あ  
及むに速小  
か代衣小面會  
して  
相談  
とつ  
てま  
さ  
あ  
由  
うら

ねへハト  
方僅  
近  
吟三  
を扱へ  
とせど  
つを放して  
をこれバツ  
つ居らう由  
例の口へ通して

# 乙 大房綴

新考らち林とび左様あらはか紅ら母を連てと赤トを此事を  
 関きしと偶然さるるど指びとせり些由早くそふ下中とつと  
 か祿の坐ひあら洞中の最明寺にせり又遠ふ下下をれて新考是ハ  
 志しりはらバトとらりえふより出るるゆりともふも赤上中即  
 の録の本を終りの文を語りきららひく立せりて辰五郎ハ奥山  
 るる山番の家小到ふ此山番と稱ふるも昼の酒食を高きハ独りの着西三種  
 とつとつて酒と副へ給事の女中がらせり當時は暮六時より仁王門と疆り  
 奥山へ入るを禁めされども新門ハ上野の宮の御用請負の持場され敢て  
 夜陰を弾くぞ爰ハ助舟の隊を避て女中ハ初めとらりつと新考が  
 か玉の母ともあらを来あけらるる  
 しつらふ侍ちあけり

# 芳春書画

開明  
小説

## 春雨文庫

第四編ヨリ  
引續キ出版

近世の烈婦孝女乃傳説を  
記する面白き珍書あり

松村春輔編輯

## 復古夢物語

初編ヨリ  
八編マデ 出版

這ハ明治太平記の前篇カテ嘉永  
六年垂米利カ使節相冊浦賀へ来船  
以来明治元年伏見戦争迄委々  
志るサ面白き書也

和田定節編輯

## 参考鹿兒島新誌

半紙本  
初篇ヨリ七篇  
迄全部十五冊

此書西国征討の始末を詳細ニ  
ある第一の實録あり

東京書肆

大島屋

武田傳右衛門

弥左エ門町十三番地



式杲齋芳春



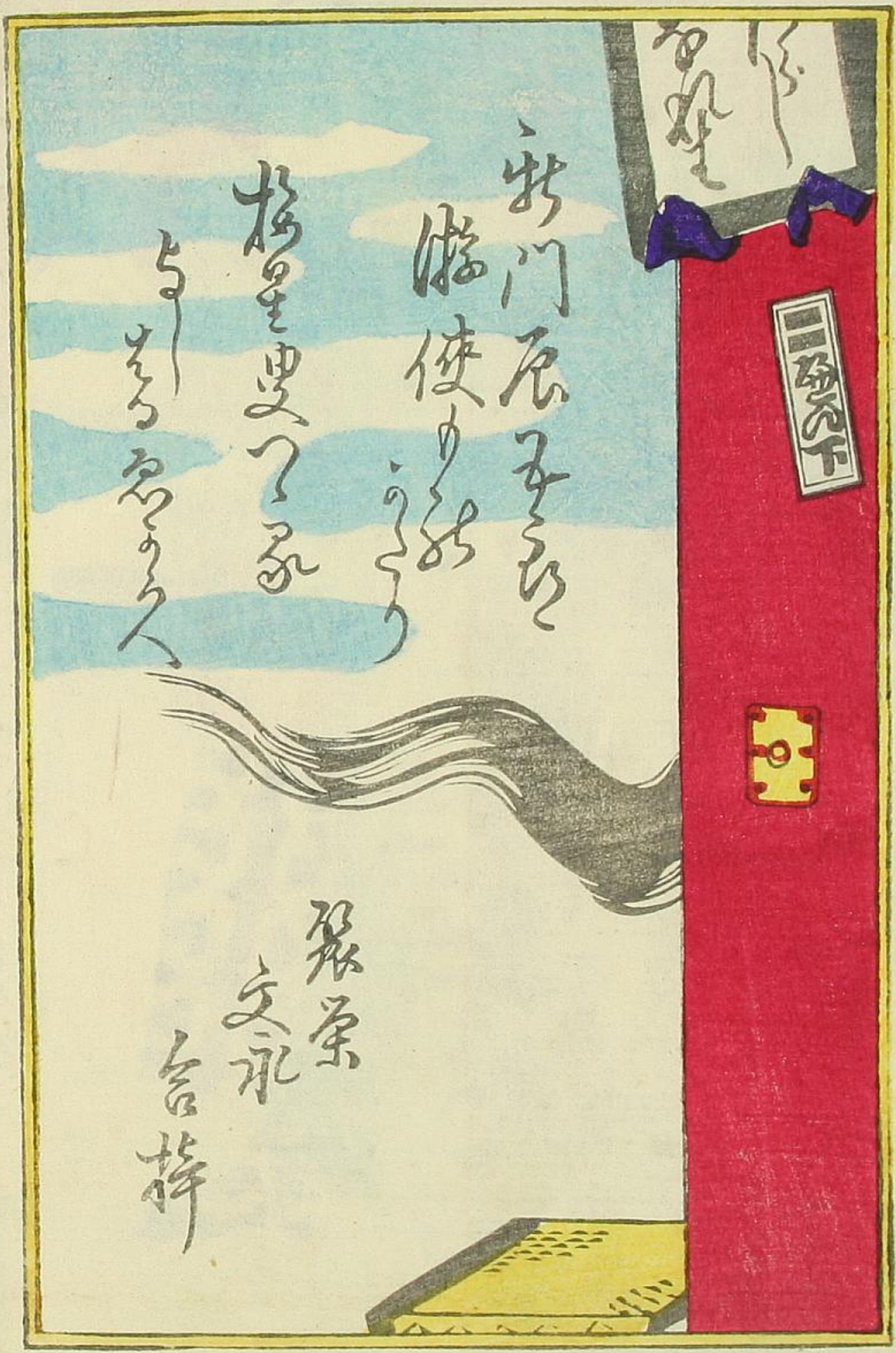
二編下

元田彫富

梅屋雙乙乃繪







新門辰五郎

遊使ゆき

梅屋史つる

とらるるるる

辰五郎

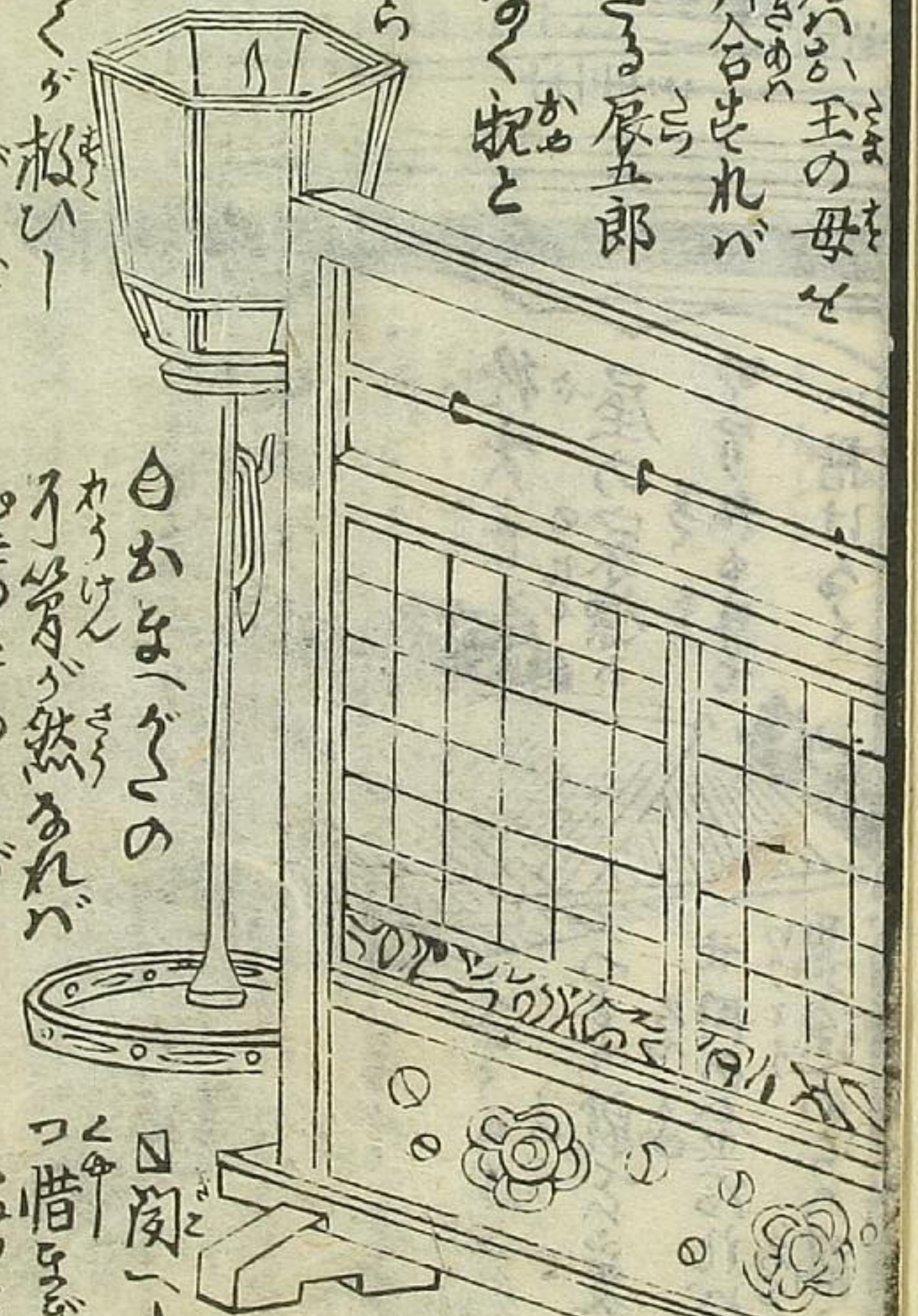
文永

台持

中々 躰てさの川 辰五郎の玉の母を  
 伴ひ来て 新門ふ引合されば  
 辰五郎より承りてつる辰五郎  
 料らひみと思ひつけく物と  
 子かゝ懸生りし異るる  
 ぬれいと縁く謝されば  
 辰五郎も亦一ト通りけり  
 ちくりみく久次郎をさうくが救ひ  
 とどめり圖らむ隅屋の仕事場老  
 助藏の巧まどか玉といふ名とさうさ  
 去これハ久次郎不之を問ひその因縁と  
 ちどめて知り和平次と後合志さる事  
 けらひせ委曲ふ示 トり相後也白

白かまがこの  
 不都合然るれば  
 令女ハ明日産後と  
 引らせさうダガ久次郎のと取らさう  
 因縁が世間忘れらるるまれば縁  
 不都合と和平次是故のめ助藏  
 の心証と助藏(口)あらば(次)

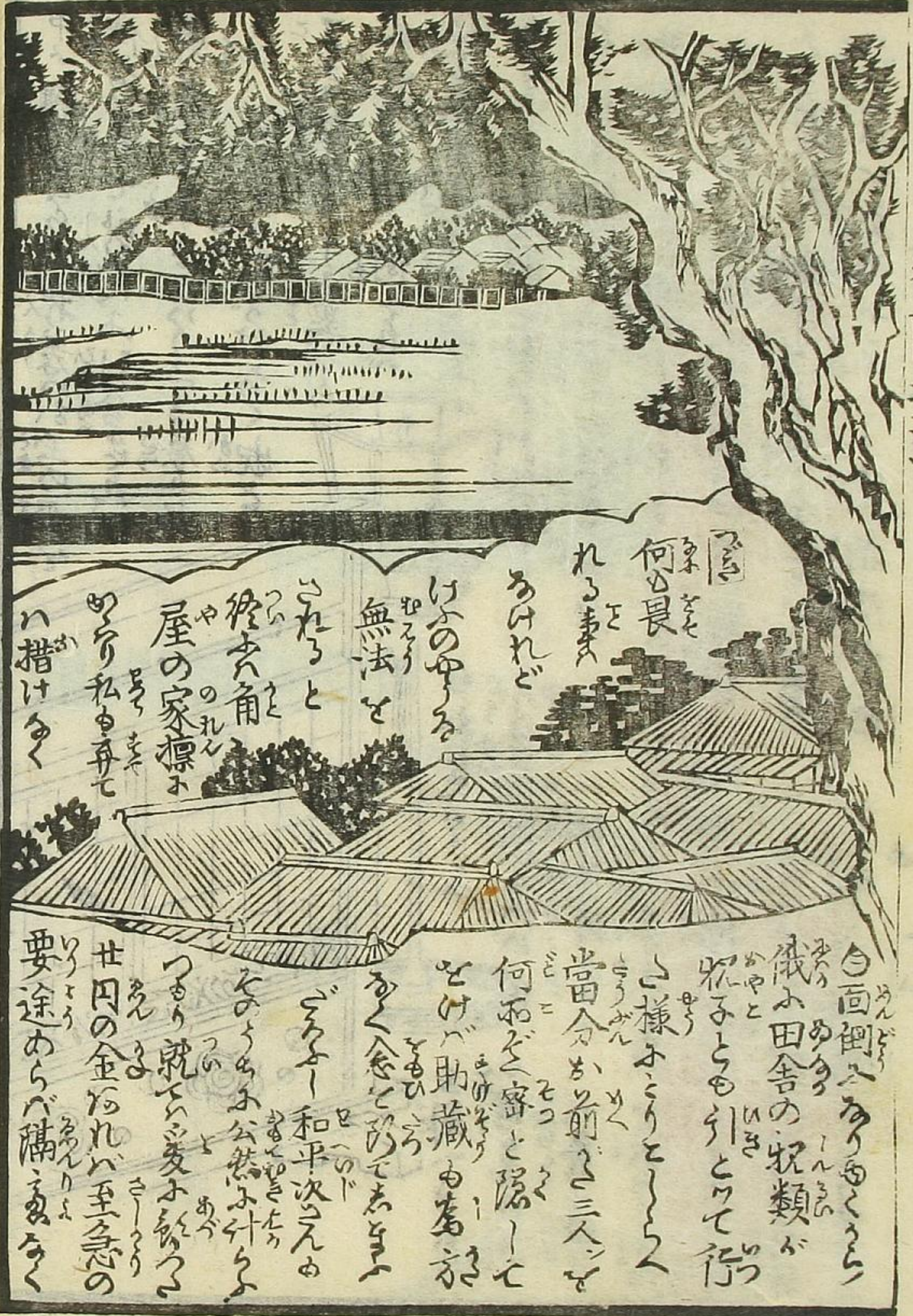
新門二編





るるとい

云るせし一遺るうらうら  
 料らひのかれい潤みつく  
 されど母祝とも、孝  
 由たこあらはにすふれとふ并  
 えまを  
 天山の時の鐘 鏗鏘みひく  
 辰  
 ろいれ又明日別れと告  
 孝に  
 孝に  
 私法より傳法院の表門前出  
 辰五郎田画越し持門の  
 傍ら木柵を跨りて是より嚮國へ



新門二

何と畏  
 れる妻  
 あけれど  
 けふのやうな  
 無法と  
 されると  
 終去角  
 屋の家標  
 けり私も丹て  
 い措けゆく

白面御入るりゆら  
 俄小田舎の祝類が  
 けりとも引とめて行  
 二様ふりて  
 當分が前さ三人  
 何れを密と隠して  
 せけハ助藏もあ  
 るく念とめてあ  
 ざんざん一和平次  
 ぞうらふ公然ふけ  
 つもり就てふ  
 廿四の金にれハ至急の  
 要途わらハ満

彼の助藏の碎られたる市九郎と女中頼と遺一から追三吟を又とり出し  
 隅屋を出し二つのおぼれてそのおひより原一赴く途中  
 モレ旦那トウ一もあつらひられてあり向は河村屋徳次郎  
 先刻の旅宿へそのりきつら今朝早くお出ましの  
 一おつひ中性的もあるゆへ今晚何れと  
 一そんまとも又仲之町とせんしてまておつ  
 ことろか目おつて宜い幸ひ彼の事件  
 一お付かたかーがトおつらあつく助藏  
 然るら此ら重箱ト直ちお二介  
 一連ちて三谷お名のゆる鰻屋の  
 一奥よりるは後お通れは徳次郎の声を  
 一ゆゑ依頼まちをいお生もさきまを疑り  
 一おられと那う世間お普通通つ徳次郎の

書箱二  
 通河村  
 屋名宛  
 の一通  
 あり  
 心  
 切の  
 汗  
 有らひ  
 らひ  
 有らひ  
 らひ  
 らひ  
 らひ  
 らひ



親おるれば竹の造さるるの如正兵衛  
 支辨にお心すその子お甘あて  
 一ゆゑ那の心いこころいおあ香  
 一やういお那がををぬ先いおま一上  
 一あがが熱の月を幸まわりを相送  
 一してお為さういや肺り  
 一から既お此の心お古  
 一と連て那の風俗をおと  
 一つひ又熟と考て返来り  
 一お俗でよとておと去送して  
 一素より一さら再昨よがとてお文  
 一言の回返りお文をよあれお偽筆をぬお  
 一為り子お命つけ質書をこらへお

此の世  
 子に親  
 外へ  
 能令  
 子に  
 異儀  
 大



差をとりての程此くとも宜しくは執成しむるべくあり  
 あり又お玉名宛の一通書知ての通り我牙をせひく病牙  
 ありたりとて縁をあるがごとくゆへに二人の  
 さらしもおかやうなくは方より折く  
 せり越し小巻ひきおろす  
 引さらば店賃も数月滞り店  
 ごとせえつりあり途方おられぬ方  
 母がとありの希いあんとゆと  
 ぞんぞん是らの委しき  
 吐しけはさるす  
 右の吹身お付お角  
 他心切おんやーわされぬ  
 助産さるあん方へさる方へ

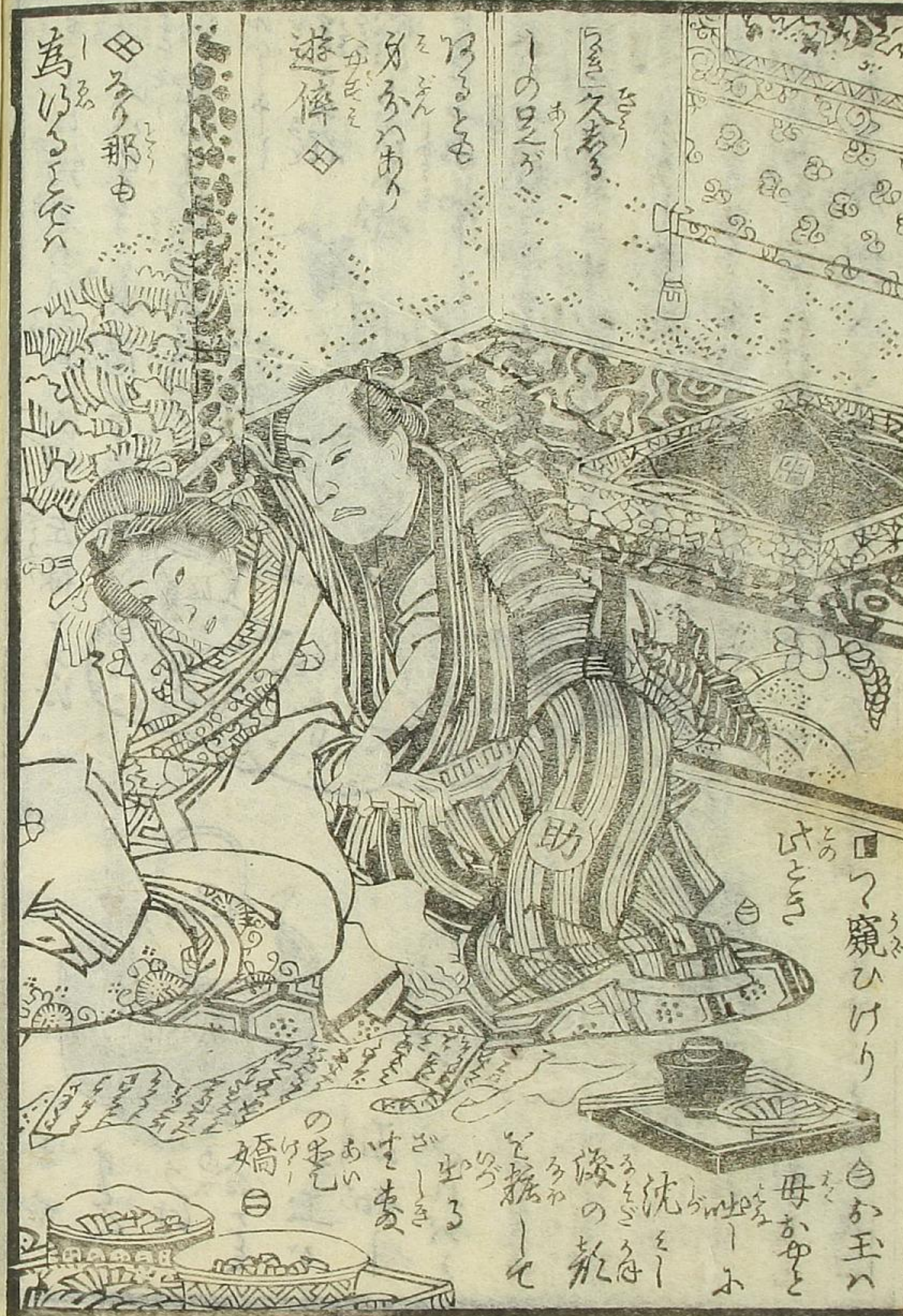


▲あまの  
 行ち  
 の  
 ぐ  
 の  
 ち  
 小  
 刻

此くゆの約束あひ固めゆあひ左様とさるは  
 此くゆの約束あひ固めゆあひ左様とさるは  
 助産さるあん方へさる方へ  
 心はちひ小彼  
 送りゆた  
 心はちひ小彼  
 送りゆた  
 心はちひ小彼  
 送りゆた



かや  
 け  
 合  
 玉が  
 知  
 くれ  
 小  
 親  
 此  
 引



◇ 多那由  
為ゆることぞ

◇ 遊倅

◇ 一の口

白お玉の  
母おやと  
沈みし  
後の光  
を糖し  
出る  
さしき  
のあ  
嬌

うー 練ふもつら  
遅ねがふ又やせ付て  
中りかきうナントけ村屋  
方堂へ水掛傳さら智  
多星 兵用八傳さら天坂  
毛野 多らひのそのありをん  
自ら誇る偽書の丹界助  
あふりか感脱し七難回賢賞  
しつら此席の巻を思ふ致と  
組打の切名次才で兵へ神速状えら  
生捕ふ足下が影さるる桶くめ一見うり  
己と一西ふもさ他席で飲るがら動静を  
足てあてられうくと教むて通知の徳次郎その  
酒食へ  
酒くも嗜まん  
助藏の件んの紙  
と懐中小し  
心ゆ空三ヶ  
ひとくこ  
の家を立  
おでよ東なる  
朝敷の分根亭へち  
通りお玉の口とけ小  
三味線のと  
酒子と合ま  
らるる助めの  
めをつけぬ  
金ひら次

新門二巻

二五三





女のはげは... 自由なる... けいご... 本... 買... 不真... 性質... の... 先... 走...  
 女のはげは... 自由なる... けいご... 本... 買... 不真... 性質... の... 先... 走...  
 女のはげは... 自由なる... けいご... 本... 買... 不真... 性質... の... 先... 走...

春... 既... 隙... けん突... 入...  
 春... 既... 隙... けん突... 入...  
 春... 既... 隙... けん突... 入...



つら... 居... お... 過...  
 つら... 居... お... 過...  
 つら... 居... お... 過...

名妓... 助... 買... 角... 老... の... 大井...  
 名妓... 助... 買... 角... 老... の... 大井...  
 名妓... 助... 買... 角... 老... の... 大井...







白の幕より此に至り壁に登極の陣より且  
 志の如き日ならんぞ押這か云久次郎の物  
 小園係よりより辰五郎の物  
 花衣の火消し中園と火車場を園清と  
 双方死傷多く終辰五郎八面島  
 遣られるを距る卅餘年前より  
 只是中園より一條の流柄を長  
 他流の枝葉雜記をこれ長  
 みのがふふありてのくを看旨  
 一巻の巻の兵部を流巻道  
 解分を聴うる也  
 妻の死を痛やまおむの事をおもくされぬか  
 遠くからよおれぬ淋しけれ川が宿するも  
 親子の入の吉由由足の上より呼を擡く前後の  
 毎の暖昧も小母の眼が透けぬ娘のうも氣づく  
 コリヤと一りさ川へ行て関の安心下火神おまを雷  
 本黄直火の灯火の消空房小異ならぬ満條も雨の  
 鎖外から一と隣へ教を足をもめて流草の流小流を急ぎうる白く解分を聴うる也

浅草旅籠町十九番地

# 秋原乙彦綴

浅草並木町十番地

# 生田芳春画

開明小説

# 春雨文庫 四編ヨリ引續出版

衆の心より  
 處女香  
 大巻八 廿五段  
 一巻巻入 三巻

此むきめきもの美の世間無類の別品  
 けりし精製の上なるり第一の  
 つゆをいづきあをさるやふ  
 のやせれ引さげふねをせし終に  
 此ころものよき求を希ふ 文栄堂記

浅草區三好町七番地

大川屋錠

吉

合梓

京橋區左衛門町十三番地

大島屋傳右衛門

明治十二年五月



宝印